



第123回 見る・聞く 一寄る年波には勝てぬ一

毎日のように仕事でパソコンを眺め、スマホでメールをチェックし、夜はLINEマンガを読んでリラックスする。気づくと液晶画面ばかりを見つめている日々である。最近では、老眼が進行したせいか、メールの文字が小さすぎて読めないこともある。液晶画面を見続けていると、本当に目が疲れてしまう。耳のほうも少しあやしい。賑やかな雑踏で会話していると、相手の言葉が聞き取りづらいのである。つまりは、目も耳も老化がすすんでいるというわけだ。この変化には、私自身がかなり戸惑っている。

▼見えづらいこと

老眼になったのは50代半ばだったように思う。とうとう老眼かと観念して、二重焦点のメガネを新調して使い始めた。デスクワークでは老眼鏡、日常生活は近眼鏡がうまく配分されるはずだが、あまりに目が疲れるので、結局別々のメガネを使う生活に戻ってしまった。最近はずっとパソコンの文字が読みづらく、変換ミスに気付かず誤字のまま送信してしまうこともある。目を休めようと、目を閉じて沈思黙考していると眠くなる。字を読む、メールを書く、運転する、日常のほとんどは視力に支えられているので、視力が衰えると不便で仕方がない。では盲目の人はどうしているのか。「目の見えない人は世界をどうみているのか」(伊藤亜沙)には、視覚障害者には死角がない、音や足ざわりに敏感になるなど、興味深いことが書かれている。目の見えない人にも豊かな世界が「見えている」のがわかる。

▼聞きづらいこと

診療していて耳の遠い高齢者との会話に苦労することがある。こちらの聞きたいことに答えず、自分の言いたいことばかりしゃべる患者さんには困ってしまう。

でも患者側の立場に立ってみると、なぜ一方的

に話してしまうのか、その気持ちが少し理解できる。この人とは会話できないかと、相手に思われたくないのである。鳥取大学医学部では手話教育を行っている。手慣れた手話者の様子を見てみると、静寂のなかで二人の表情がどんどん変わっていく。縦横無尽に「会話している」ことがわかる。

▼年を取ることを楽しむ

徳川家康の祀られた日光東照宮には「見ざる聞かざる言わざる」の三猿が彫り込まれている。他人の欠点に触れなければ人との争いは避けられるという警句だが、凡人はそれでもなお「見たい聞きたい」ものだ。見たくても見づらい、聞きたくても聞きづらいという状況は、思った以上にストレスがかかる。「寄る年波には勝てない」なら、むしろ「どう楽しむか」という発想に切りかえたほうがいい。目の見えない人、耳の聞こえない人が世界をどうとらえているかに想いを馳せる。年齢を重ねることで生まれる豊かさもある。若い頃は右往左往したことに冷静に対処できる、他人の気持ちや状況を想像できる、難しい哲学者の言葉が心に沁みる、そういう内面的な豊かさに注目してみるのもいいな、と思うのである。



鳥取大学医学部
地域医療学講座
教授

谷口 晋一
(たにくち しんいち)